



小江まちカフェ

代表 早川 康子

地域住民のつながりを深めるための交流活動を行う。令和5年度、まちづくりに貢献した団体を表彰する、がまごおりまちづくり賞を受賞。

意識の変化

主任児童委員をしていた時に出席した会議で、保護を必要とする状態にある要保護児童のことを知り、こついった子どもたちが自立するためには何が必要なのだろうと考え始めました。そんな時、縁あって受講した男女共同参画人材育成セミナーの中で、女性や社会に関わる問題を学び、「もっと積極的に社会参加していこう」と意識が大きく変わりました。あれが私のターニングポイントだったと思います。

活動のきっかけ

ある日、蒲南小の先生から「子どもの夏休みの食事が心配な家庭がある。地域で何か支援はないか？」と相談され、地域には子どもに対する支援が何もないことに気付きました。当時、「子どもの16人に1人が相対的貧困である」と盛んにメディアで言われていたのに、目に見えないために他人事になっていました。

日頃から感じていたのは、「地域の人間関係が希薄になっている」ということ。町会役員を務めていた関係で、歴代総代からの応援もあり、まずは思ったことをやってみようと、町会役員の女性3人で地域の顔つなぎ活動をすることにしました。

小江まちカフェ

地域の顔つなぎ活動は、公民館で気軽におしゃべりをする「まちカフェ」からスタートし、平成28年には「小江まちカフェ」として市の助成金制度へ応募し、2年間で2つの事業を行いました。その中の1つが「がまん畑」です。蒲南小の子どもたちと地域の人たちが一緒に野菜をつくることで、お互いをニックネームで呼び合い、気軽に話し合える関係になれるといいなと



思っています。今の運営資金は野菜の売上ですが、助成金制度の利用や活動のノウハウががまごおり市民まちづくりセンターからアドバイスをもらっています。小江まちカフェは他にも、「春休みの百人一首と五平餅作り」など、さまざまな活動を行っています。1月からは「がまん食堂」を中学生たちと始めました。これは、調理を手伝ってくれる人がいるからこそできる活動です。

現在はこれらの活動のほかに保護司もしています。保護観察の10代の子どもたちと関わる中で、「幼い時から地域の誰かと関わっていれば、違う未来があったんじゃないか」と感じています。人に話すことで心が落ち着くことがあります。親にも友達にも言えないことってありますよね。そういう時に、そこに来れば誰かと話せるという